



「風と人びと」

吉野正敏著

東京大学出版会，1999年7月

A5版，220頁，2000円（本体価格）

風とは自然科学の対象であるばかりでなく，人間科学や文芸一般の対象でもある。風がどうして吹くのかを理解するのは気象学（物理学）におまかせして，風が吹いたら人々の生活にどう影響するのかという視点で，可能なかぎり広く詳しく風を調べることに，気候学者としての著者の興味がある。

ひとたび風が物理の対象という視点を離れ，人間生活の対象に位置づけられると，音楽の中の風であれ，絵画の中の風であれ，文学にみられる風の比喩であれ，何でもが著者の興味の対象となる。これが，吉野気候学の基本スタンスであり，そこに学問することへの楽しみがある。

本書は著者による同じ出版社の「世界の風」の続編としてまとめられたものである。世界の風を読者に紹介するのが前著の目的であったのに対し，本書は著者による長年の“風への思い”を綴ったものである。風の専門家でない一般の人にとって，風がどうして吹くかは些細な問題である。しかし，風が吹くから変形樹ができ，防風壁ができ，冷たくて乾燥した風が吹くから干し柿はうまくなり，風味が増す。このような意味での一般の人の風に対する関心は高く，数えれば限りがないほど人ととの係わりとしての風が見えてくる。本書は，著者がこのような視点でこれまでに集めた風に関する記述であり，著者の幅広い知識量には心から敬意を表する。

本書「風と人びと」は以下の6章で構成されている。

第一章 風と人びと

第二章 風とともに

第三章 インドネシアとモンスーン

第四章 熱帯の風

第五章 タクラマカン砂漠と風

第六章 風の気候学

風と人びとの関係は日常の会話の中にも多く登場する。いくつか本書の中から例を挙げてみよう。たとえば，空を見上げてイワシ雲とかスジ雲がでているような空を大空（おおぞら）という。“天翔る大空”といっ

た歌で表現される空の大きさである。大空の他に，中空（なかぞら）があり，ちょうど鯉のぼりを見上げる空の大きさの事をいう。しかし，小空（こぞら）という言葉はなく，これに相当する表現は“うわの空”であり，松の木の梢の空間スケールを言う。それが今日では“耳に入らずにアタマの上を越してゆく風”のことを言うようになった。

風と人びとの関係は世界遺産の中にも見ることができる。本書では風神像についての記述がある。稲作農業や沿岸漁業にたよる人々は，台風などの強風による被害を最小限にとどめることを祈願して，各地で古来から風の神に対し風祭りや風祈禱を行ってきた。我々の先祖は自然観測がするどく，風の記述は「源氏物語」の時代からきめ細かになされている。鎌倉時代に造られた京都三十三間堂の風神像は，開いた口もとから牙をむき出し，風の詰まった大きな袋を首の後ろに背負い，2箇所出口を大きな手で握り締めている。我々の先祖が風の神の姿として考え抜いた結果，日本ではこのいかめしい姿になった。最近，ギリシャ神話に出てくる風の神「アイオロス」の銅像がイタリアのシチリア島で2500年ぶりに発掘された。その風神像は実に人間らしい表情であり，日本のこわごわとした風神像と対照的であるという。

明治27年，「静岡県水産誌」という書物が県漁業組合から発行され，その中に伊豆から浜名湖までの沿岸漁業と風の関係について書いてあった。局地風は著者の研究の中心テーマであったから，著者にとってこれは，静岡県沿岸の局地風の特徴が事細かに記述してある掘り出し物であった。もう40年以上も前のことだが，この本を初めて著者が手にした時は正直に言って，感動で手が震えるほどであったそうである。この水産誌の中の著者の思い出の一句を紹介しよう。

漁師殺すにゃ 刃物はいらぬ

ニシの十日も 吹けば死ぬ

ここで，ニシとは地元の漁師言葉で，風速5メートル毎秒くらいの西風を意味する。

タクラマカン砂漠の南東部ではカラブランという呼び名の砂嵐がある。カラブランとは直訳すれば黒風で，昼でも暗くなることからそのように呼ばれている。著者はカラブランの資料を現地で集め，早速日本に戻り報告した。カラブランを日本に伝えたのは著者が初めてだろうとひそかに思っていたある日，すでに100年近

くも前の大谷探検隊の記録の中にカラブランの名が紹介されていることを知り、愕然とし、今更ながら探検の意義を知ったそうである。著者の風に対する執着心や研究態度は、こんな記述から伺い知ることができる。

日常用語や日常生活に見られる風の記述の中から、いくつか興味深いものを挙げてみよう。目に見える景色、すなわち地形の表情や色彩のことを景観(ドイツ語ではランドシャフト)というが、景観とほぼ同義語に風景がある。目に見えるものだけでなく、その背景にある目に見えない自然や人間活動のすべてを含んだものとして風の一語が充てられる。

季節に音があるように、風には音がある。田植え後の水田から聞こえる蛙の声。夏の蟬しぐれ。収穫祭の音。風に乗って遠くから響く除夜の鐘。本書のなかで著者は、環境庁による季節の音風景をまとめた「日本の音風景100選」を紹介している。風鈴も日本の夏の風情として、調べればいくらでもおもしろい話に突き当たる。風の音楽。冷たいボラが吹き荒れる夜、ヒューヒューと雅楽の笙のような音色が聞こえてきた。五線紙には到底書き込めない、同じフレーズが二度と現われることのない風のメロディーをカルマン渦はかなでる。

風は目に見えない。見えないものは絵にならないとしたら大間違いである。季節に青春や白秋などの色があるように、風には色がある。風の絵を書く人や、風をテーマにした写真は多い。地名に風がつく場合も多

い。“寒風山”がその地域の人々のパーセプションを端的に表現しているように男鹿半島が風のイメージの強い半島である事に間違いない。哲学者フロイトによると、“精神”という言葉は神の吸気を意味する“微風”が語源であるということから、風の哲学の話題が繰り広げられる。風情がある、風雅を好む、風雲急を告げる。著者は風の名がつけば何にでも興味を示してきた。人はそんな吉野気候学を称して風流な学問と呼んだ。

最後に、本書にあった素敵な風の詩を紹介しよう。

赤とんぼ 空に流れのあるような

「風信」という愛媛県の肱川町だよりの中から著者が本書で引用した川上マサエさんの作品である。赤とんぼの群れが、同じ方向を向いて優雅に舞う姿に、目には見えない目の前の風を見せてくれた、実に生き生きとした句である。

風をテーマに一人の著者がこれほど多岐に渡る内容を記述するのは、容易なことではない。頭の下がる思いを抱くのは私ひとりではあるまい。読んでみて興味がわく事柄が盛り沢山であり、知識欲旺盛な方にはおすすすめな本である。吉野気候学は気候学の重要な一分野であり、後継者が是非とも必要である。本書がきっかけとなって、この分野に新風の吹く日を期待している。

(筑波大学 田中 博)